別紙 2

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　磯野達也

語の多義性は，狭い意味での理論言語学研究にとどまらず，計算言語学・自然言語処理や心理・神経言語学などの隣接諸分野にも大きな問いを提起する重要な問題である。特に述語の多義性は，意味の相違が統語分布の相違と密接に関わることから，様々な議論がなされてきた。磯野氏の提出論文 Polysemy and Compositionality in Generative Lexicon: Deriving Variable Behaviors of Motion Verbs in Relation to Prepositions（生成語彙論における多義と意味の合成性—前置詞との関係に基づく移動動詞の多様な振る舞いに関する考察—）は，動詞の多義性の問題に，意味の合成性 (compositionality) の観点から取り組んだ労作である。生成語彙論 (Generative Lexicon) の枠組みを採用し、空間関係を表す表現、すなわち移動動詞と空間前置詞の精密化された語彙表示を提案すると同時に，語彙表示に作用する生成的な操作の機能と条件を明らかにしている。

本論文は，第 1 章の導入のち、第 2 章で理論の枠組みを導入、第 3 章で問題点と提案の要約を行った後、4-7 章で具体的な言語現象の分析を通して理論上の提案を行い、第 8 章で結論と残された問題について述べるという構成になっている。第 4 章では grow などの状態変化動詞の分析を通して事象構造の検討を行い、ACT とは異なるタイプの過程事象として MOVE が必要であることが論じられる。第 5 章では、場所格交代を示す自動詞（swarm など）および光や音の放出を表す動詞（blaze, rumble など）の観察を通し、主要部が未指定となっている動詞の統語上のふるまいが説明される。第 6 章では倒置構文の分析を通して，複数の述語の語彙意味表示から句の意味表示を導出する共合成の操作がどのような原則に従うか，また共合成によって生成される句の意味表示において主要部がどのように決定されるかを明らかにしている。第 7 章では、日本語のマデ句などを取り上げ、合成の操作によって述語と付加詞の意味表示から句の意味表示を導出する手続きが提案される。

本論文の最大の成果は，部分（たとえば語）の意味がわかれば，そこから全体（たとえば文）の意味を導出できるとする意味の合成性の立場を突き詰めてゆくことで，どこまで多義の問題を解決できるかを具体的に示した点にある。句の意味を合成する際に、要素となる語の内部構造まで言及する共合成の操作を採用する（すなわち、古典的な形式意味論とは立場を異にする）ことによって、あくまで合成的に意味計算をする（すなわち、要素から導出されない「全体の意味」を想定する認知言語学的な構文文法とは相容れない）立場から、動詞の意味の多様性とそれに伴う統語分布の多様性を生み出す文法のメカニズムを、種々の具体例の詳細な分析から解き明かした点が高く評価できる。

第二に、先行研究では動詞に比して詳細に論じられることの少なかった前置詞・後置詞の意味分析を大きく取り上げ、その意味が動詞句全体の意味にどのように関与するのかを具体的に明らかにした点で、本論文は意味理論に大きく貢献している。前置詞句・後置詞句が動詞句の意味に関与することは意味論研究においては周知の事実

であるが、その具体的なメカニズムは未解決の部分が大きい。本論文では、限られた数の前置詞・後置詞しか扱われていないものの、その意味と動詞の意味との相互作用が詳細な事実観察に基づいて明らかにされており、意味合成の仕組みの一つの側面が浮き彫りにされている。

第三に、生成語彙理論の枠組みに対する貢献が評価できる。この理論は、Pustejovsky (1995)で提案され、理論言語学のみならず自然言語処理の分野にも大きなインパクトを与えたものであるが、その影響の大きさにもかかわらず、理論の細部は必ずしも十分に展開されては来なかった。特に、事象構造における主要部決定の仕組みや共合成の操作にかかる制約など、この理論がどのような予測をなし得るかに関わるという意味で重要でありながら、その詳細が解明されていなかった点に焦点を当て、具体的な言語事実の分析を通して明らかにしたことは、この理論の進展に大きく寄与するものである。

このように本論文の学術上の意義は高く評価されるが、残された問題も多く，審査会でもいくつかの指摘がなされた。具体的な分析上の問題としては，事象構造上でどこから使役の意味が生じるのか説明が不十分であること，主要部の指定・無指定の差は各語彙項目に個別に規定されているが、それぞれの語のより深い意味分析からこのような区別を導出する方向を模索すべきであること，さらに，語の意味からだけは合成できず、構文の意味を取り入れているかに見える分析が一部に含まれるが、類例を考慮に入れれば前置詞の意味の再検討によって解決する可能性が考えられること，などである。また，一部に概念規定の不明確さが残ることが指摘されたほか，古典的形式意味論や構文文法など、対立する理論上の立場との対比をより明確に打ち出すような論述方法をとるべきであるとの助言もあった。ただし、これらの指摘された問題の多くは、磯野氏の研究の欠点というよりもむしろ、今後展開して行くべき道の広がりの可能性を示唆するものであり、学位論文としての本論文の価値を損なうものではない。

以上の評価から、本審査委員会は磯野氏の提出論文について博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。